

★アゼルバイジャンにとっての非同盟主義

第5回の学術研究部研究会

- ◇日時 2018年8月1日(水) 午後2時から4時半
- ◇テーマ 「アゼルバイジャンにとっての非同盟主義」
- ◇報告者 清水 学 ((有)ユーラシア・コンサルタント)
- ◇会場 富士国際旅行社会議室

報告の目的と問題意識

旧ソ連圏のコーカサス(アゼルバイジャン、グルジア〈ジョージア〉、アルメニアとロシア領北コーカサス)地域はカスピ海と黒海に挟まれ、米国は当然ですが、ロシア、イラン、トルコ、さらにイスラエルが深く関与してきた地政学的あるいは戦略的に重要な地域です。さらに域内では歴史的に複雑な民族紛争を抱えています。アゼルバイジャン内の自治共和国(現自治州)であるナゴルゴ・カラバフはアルメニアの支援で事実上「独立」していますが、アルメニアがアゼルバイジャンの領域の一部を占拠しており、アゼルバイジャンとアルメニアは停戦協定を結んでいますが時々武力衝突が起きています。

このような民族紛争は1991年末のソ連崩壊の要因の一つとなりました。1991年末にコーカサス3国は独立を達成しましたが、ロシアとの関係、影響力を拡大しようとする米国・NATOの働きかけもあり、その後も緊張が続く地域となっています。2008年夏にはグルジア・ロシア戦争が起き、グルジアからアブハジアと南オセチアが事実上分離しています。またイスラエル・イラン対立においても軍事的戦略的に重要な地域でもあります。

アゼルバイジャンは2019年の非同盟諸国会議の主催国になっていますが、極めて複雑でダイナミックな国際関係のなかでのこの国の外交的選択は単純ではないと思います。アルメニアとの関連での「国益」追求もあり、その複雑性を冷静に分析する必要があります。しかし非同盟諸国首脳会議開催国という選択は注目すべき方向も示しています。

アゼルバイジャンを理解するための前提条件として、研究会ではアゼルバイジャンに関する基礎的知識を提供することを主たる目的とします。帝政ロシア時代の歴史、ロシア革命と独立とソ連編入、ソ連崩壊との関連、最も重要な外交課題であるナゴルノ・カラバフを巡るアルメニアとの戦争、イランとの複雑な関係、トルコとアゼルバイジャン、旧ソ連地域における対ロシア政策の立ち位置、対欧米関係、産油国としての経済政策などに触れられればと思います。アゼルバイジャンは多くの問題が絡み合って現れる地域であり、非同盟主義について、どのように位置づけているかもリアルに見る必要があります。

以下、触れる可能性のあるトピックを列挙します。ゾロアスター教、シーア派12イマーム派優勢(イランと同様)、山岳ユダヤ人、帝政ロシアの資本主義発展の拠点の一つ、石油産業、グルジア人スターリンの登場、ノーベル賞のノーベルの活躍、ロスチャイルド財閥、ソ連の結成と解体双方に関連、リヒャルト・ゾルゲ、チェチェン、アリエフ大統領、中国との関係など。

ソ連邦*解体とコーカサス3国の独立(1991年末)

南コーカサス（ザカフカース）の3新独立国

- ・アゼルバイジャン共和国
- ・グルジア（現呼称ジョージア）共和国
- ・アルメニア共和国

コーカサスはソ連の「辺境」地域であったがいわゆる「後進」地域ではない。ロシア革命以前に資本主義の発展が見られた地域だからである。しかし多様な民族・文化・言語・宗教（東方キリスト教・イスラーム・ユダヤ教など）が交錯する複雑な地域であり、不安定性を孕む地域である。ソ連邦（ソビエト社会主義共和国連邦）解体直前からアルメニア人・アゼリ人との民族紛争が激しくなり、ソ連解体の一因となった。



ソ連邦とコーカサス

コーカサス3国はソ連邦を構成していた。ここは、ソ連結成時に連邦のありかたで重要な問題を提起し、またソ連解体時直接的原因となる民族紛争や「民族浄化」が起きた地域である。コーカサスは、ソ連において民族問題をもっとも鋭い形で示した地域。ソ連で独自文字を保持したのはグルジアとアルメニアのみで、他の民族後はキリル文字（ロシア語文字）に代えられた。

アゼルバイジャンの特徴 アゼルバイジャンは欧州か、アジアか？

アゼルバイジャンは1991年10月18日に独立した共和国。チュルク系のアゼリ人が主体（しかし2倍の数のアゼリ人がイラン北西部に居住）で約1000万人。民族・言語的にはトルコとの一帯意識が強い。しかし宗教的にはシーア派12イマーム派が多数という点でイランと共通している。アルメニア、トルコ、イランと接する飛び地ナヒチェバンがある。前大統領ハイデル・アリエフ（就任1993～2003）とその長男で現大統領のイルハム・アリエフ（就任2003年～）の出身地はナヒチェバンであり、同地は多くの政治家を輩出していることで有名。複数政党制で与党は新アゼルバイジャン党で党首はイルハム・アリエフ大統領。

アゼリ人は民族関係が複雑な南コーカサスでの主要民族の一つ。他にはグルジア人、アルメニア人など。文化的歴史的には、ゾロアスター教、ペルシヤ文化などの影響が残る。山岳ユダヤ人も残存。全体として多様な文化文明の通過点。

ところでアゼルバイジャンを含むコーカサスは、欧州か、アジアか？ 意外に難しい問題だ。アゼリ人はチュルク系で広義のアジアとの一体性を失ってはいないと思うが、やはり「ヨーロッパ」世界に属しているという意識が強いのではないかと思う。しかし同時に帰属意識が流動的側面を持っていることも事実である。政治的環境の変化が重要である。

極めて複雑・錯綜する国際関係

(1) アゼルバイジャンの自治共和国であったナゴルノ・カラバフを巡るアルメニアとの深刻な対立を抱える。ナゴルノ・カラバフは1992年以来、自らを「独立国」を主張しているが、国際的に承認している国はない。国連でも認められていない。停戦協定はあるが、

しばしば武力衝突が起きる。

(2) トルコはアゼルバイジャンの主張を支持しているが、ロシアは「中立」を掲げつつも、アルメニア寄りであり、同一の安保ブロックのメンバー国。

(3) イランは大アゼリー主義に対する懸念から、アルメニアを支援してそれを牽制する立場であったが、最近ではアゼルバイジャンとの関係も改善基調にある。イランは宗教的には同一のアゼルバイジャンを牽制し、キリスト教国のアルメニアと緊密であるなど、屈折した関係を構築してきた。

産油国としてのアゼルバイジャン

—石油は 19 世紀末から今日まで重要な役割を果たしている— 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてバクー油田は当時全世界の石油の半分を生産し、輸出していた。照明用が中心的用途。グルジア人スターリンはバクーの石油労働者の運動を組織して革命運動で頭角を現した。

現在でも石油ガス輸出国であるが、同時にパイプライン問題でも重要な役割を果たす地理的条件下にある。

- ・カスピ海油田を中心に石油ガス輸出は輸出総額の 9 割を占める
- ・国際石油市場動向でその経済は大きな影響を受ける。
- ・2014 年まで「カスピ海のドバイ」と言われる好況。その後、油価低落に伴い苦境に陥る。一人当たり GDP は 7000 ドル台から 5000 ドル台水準に低下。

・「オランダ病」*問題を抱えている。しかし農業生産は一定の基盤がある。

*天然資源の輸出により製造業が衰退し失業率が高まる現象

- ・石油ガス外交（対ロシア、トルクメニスタン、カザフスタン等）への影響力大。
- ・パイプライン問題、カスピ海の法的地位紛争に関わる。
- ・中国の「一帯一路」とアゼルバイジャン（AIIB 融資では最大のプロジェクトである天然ガスパイプラインの主体）

ナゴルノ・カラバフ問題・ソ連時代はアゼルバイジャン内の自治州

- ・アルメニア人の比率の変化（1923 年 94.4% から 1979 年には 75.9% に低下）
- ・1987～88 年頃、ナゴルノ・カラバフのアルメニア人、同地のアルメニアへの移管を要求。

・1988 年 2 月 スムガイト事件。アゼルバイジャンとアルメニアの対立拡大。1994 年 5 月、ロシア及び OSCE* の仲介により停戦が合意され、OSCE ミンスク・グループ共同議長国である米・仏・露の仲介により和平の努力が続けられているが、解決の見通しは立っていない。

*OSCE：欧州安全保障協力機構

アゼルバイジャンの安全保障政策の選択とその軌跡

GU(U)AM のメンバー国としてのアゼルバイジャン

旧ソ連内共和国でロシアとの対立・紛争を抱える国との緩やかな連合組織（軍事同盟ではない）

- ・1996年第1次チェチェン戦争でロシア敗北
- ・1997年ストラスプールの欧州評議会で GUAM が結成される。

GUAM（グルジア、ウクライナ、アゼルバイジャン、モルドヴァ）、この4カ国はロシアとの間で何らかの問題を抱える旧ソ連構成国。

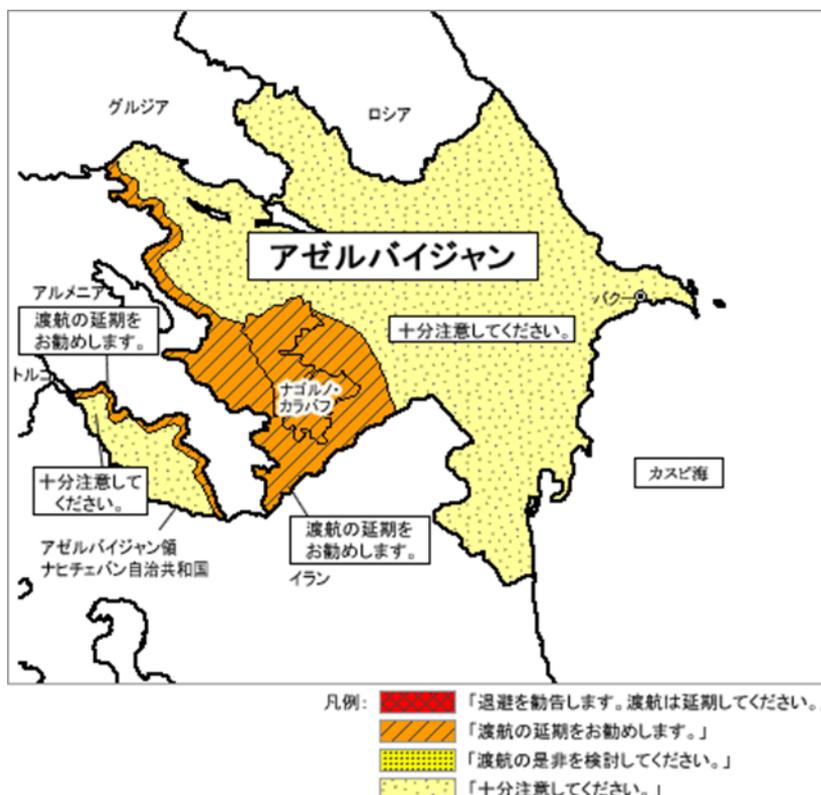
・この目的は、パイプラインのルートなどの政治経済的なものであるが、CSTO*への非加盟国であるため、米国の強い支援を受ける。

（1）解体後のソ連邦から独立した共和国は、バルト3国（ラトビア、エストニア、リトワニア）を除く12カ国は独立国家共同体（CIS）を結成する方向に向かい、集団安保機構を結成しようとした。1992年にロシアを中核にして集団安全保障条約（CST）が成立した。それが***CSTO（Collective Security Treaty Organization）**に発展し、旧ソ連構成諸国による安全保障・領土保全を目的とする条約機構となった。しかし、すべてのCIS諸国が参加したわけではなく、ロシアとの間に係争事項を抱える国は参加せず、距離を置いた。

2004年に同機構に発展。最高意思決定機関の集団安全保障会議は加盟国の首脳により構成される。ロシア・アルメニア・ベラルーシ・カザフスタン・キルギス・タジキスタン・ウズベキスタンの7カ国が加盟（2017年現在）。NATOに対抗するため、ロシアを中心として設立されたもの。

・1999年、NATO創設50周年にGUAM各国の大統領が招待され、出席。同時にウズベキスタンの加盟が発表され、GUUAMとなる。

ナゴルノ・カラバフ 外務省危険地域地図



NATO とアゼルバイジャン

アゼルバイジャンは NATO 加盟国ではないし、ロシアとの関係で加盟の意図はないが、協力関係にある。

- ・ 独立直後の 1992 年 3 月に評議フォーラムである「北大西洋協力評議会（NACC）に参加、それは 1997 年に「ユーロ大西洋パートナーシップ評議会」となる。
- ・ NATO とアゼルバイジャンの関係を規定したのは故ハイデル・アリエフが 1994 に調印した「平和のためのパートナーシップの枠組み」である。それにより政治対話を行い、対象は、地域安全保障、アフガニスタンへの貢献、エネルギー安保。安全保障・国防、NATO の作戦参加などを含む。
- ・ 2004 年に The Individual Partner Ship Action Plan に参加。第 1 次（2005～2007 年）、第 2 次（2008～2010 年）、第 3 次（2012～2013）、次に（2015～2016）を実施。今まで 200 ぐらいのプロジェクトに参加。それに防衛計画のレビューなどを行っている。コソボ、アフガニスタン、イラク戦争に 20 名程度参加。

アゼルバイジャンと非同盟主義（第 1 段階 2011 年）

- ・ 2011 年 5 月 25 日、NAM50 周年インドネシア会議で正式加入
欧州ではベラルーシに次ぎ 2 番目。旧ソ連圏ではウズベキスタン、トルクメニスタン、ベラルーシに次ぎ 4 番目の正式加盟国。

背景として 2008 年のグルジア・ロシア戦争の影響を避ける意図があったと見られる。

アゼルバイジャンは CSTO からは距離をおき、OSCE*や欧州評議会には参加している。
（当時、アルメニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、ウクライナ、モンテネグロは NAM のオブザーバー）

*欧州安全保障協力機構で、欧州、中央アジア、北米の 57 カ国から成る世界最大の地域安全保障機構

アゼルバイジャンと非同盟主義（第 2 段階）

- ・ 2018 年 4 月 5 日～4 月 6 日、バクーで「持続的発展のための国際平和と安全の促進」のタイトルで外相会議を開催。
- ・ 2019 年に首脳会議主催国で議長
- ・ 積極化の背景は不明であるが、考えうるのは
 - （1）米国のイラン核合意（JCOPA）からの一方的離脱が見込まれるなかで、対イラン軍事行動にアゼルバイジャンが基地提供などで巻き込まれることに対する警戒心。アゼルバイジャン・グルジアはイスラエル・イラン対立では戦略的要地。
 - （2）同様にイスラエル・イランの対立に距離を置く。
 - （3）NAM への積極的参加は、ややトルコとの間に距離を置き、他方ロシアとイランにやや接近するシグナルを持つ。アゼルバイジャンが西側機構と距離を置くことがロシアの不安を緩和し、イランの懸念を縮小する。

アゼルバイジャンと NAM（非同盟運動）との関係をどう考えるか

1991 年の独立後のアゼルバイジャンは、初期の混乱期にアゼリ一民族急進派の複数の

短期政権が続いた後、ソ連時代以降の老練な指導者ハイデル・アリエフに権力が戻った。アリエフはコーカサスを通じて旧ソ連圏に影響力を拡大しようとする米国・NATO、アルメニアとの関係を利用して影響力保持を狙うロシアの間に立って、極めて難しい対応を迫られた。特にナゴルノ・カラバフ問題とアルメニアとの緊張関係はアゼルバイジャンの安全保障の核となった。アゼルバイジャンは旧ソ連圏で結成された親露同盟に足を踏み入れるとともに、間もなく NATO への接近を同時に求めようとした。それは一見矛盾するようであるが、流動的情勢のなかで力関係を見ながら自国の立ち位置を考えるという慎重な対応であった。親露的安保機構 CSTO を 1999 年に脱退すると、ロシアと問題を抱える旧ソ連圏諸国と緩やかな政治的同盟である GUAM をグルジア・ウクライナ・モルドヴァと結成した。

NATO は GUAM をロシアと対抗する組織とみなし積極的接近をはかった。しかし 2003 年に後継大統領となったイルハム・アリエフは、2008 年にグルジア・ロシア戦争でグルジアが敗北すると、ロシアの力を考慮する必要性を一層痛感したと見られる。アゼルバイジャンは NATO とは「平和のためのパートナーシップ」を通じて協力関係を継続強化する路線を継続してきたが、ロシアを刺激するリスクの大きい正式メンバー国になる意図は表明していない。

2011 年の NAM への加盟は、巧妙なバランス外交である。それはロシアに対して、アゼルバイジャンが NATO の正式加盟国になる意図はないという明確なメッセージを送るものであった。ロシアが最も懸念するのは旧ソ連構成国の NATO 正式加盟の動きだからである。

しかし 2019 年に NAM 議長国を引き受けるアゼルバイジャンの外交的選択には、2017 年の米トランプ政権登場以降の中東政策の新たな変化も反映されている。米イスラエルの対イラン強硬路線の展開とあらたな緊張のなかで、アゼルバイジャンがイラン攻撃の基地あるいは補給路に使用される可能性が懸念されるようになった。イランとの対立に巻き込まれることはアゼルバイジャンにとって極めて大きなリスクをもたらすものである。NAM の有力メンバーとしての存在は、このようなリスクに巻き込まれることに対するひとつの防波堤の意味を持つ。

アゼルバイジャンは今後とも個々のプロジェクト・ベースでの NATO との協力は軍事行動も含めて継続していくものと思われる。その際、政策的オーナーシップを失わずにそのメリットを得るといふ姿勢は維持するとともに、不要な地域紛争に巻き込まれない状況づくりを追求していくと見ることができる。その際、NATO や CSTO のような軍事同盟の正式加盟国にはならないという NAM の制約・原則のなかで動くことになる。野党のなかには、NATO の「笠」に入る方向を目指すべきだという主張もあるが、アリエフ大統領は NAM を選択したのである。

非同盟運動への源流

- ・ 1990 年代独立直後の危機のなかで、故ハイデル・アリエフ大統領が生み出した「バランスの取れた外交政策」の延長線に位置する。
- ・ ロシアのアルメニア支持に対する不信から NATO とのパートナーシップを保持しているが、加盟という選択肢は考えていない。ロシアを過度に刺激することも警戒。

- ・同時に NATO には加盟しないが軍事面でも協力は続ける、米国とも同様。
- ・イスラエルとの関係もイランを過度に刺激しないように注意。
- ・エネルギー（石油・ガス）外交の複雑さを十分理解。パイプラインの政治性。

中国の役割も重視。アゼルバイジャンは、AIIB の 2 番目の融資対象国、TANAP（アゼルバイジャンの天然ガスをトルコ経由でヨーロッパに運ぶパイプライン建設計画）へ 6 億ドル。

ハイデル・アリエフ前大統領の言葉

ある国々の友人にもなれず、さらにそれ以外の国とは敵対関係であるという状況にいることはできない。ところがほとんどの国が実際にはこのように行動しているのである。アゼルバイジャンはどの国とも敵対関係になりたくない。同時に外国の政策の犠牲にもなりたくない。アゼルバイジャンは自分自身の独立した政策を持っている。同時にわれわれは欧州・米国と良好な関係を発展させている。それによって我々自身の民族的アイデンティティーと資源（広義）を保持するとともに、彼らの経験から受益することができるのである。

Heydar Aliyev, 1999

補論：ソ連結成時の民族問題（1）スターリンの「自治共和国案」

- ・1922年8月にロシア共産党政治局は、10月革命後「社会主義化」し、かつ「独立共和国」となった、ウクライナ、ベロルシア、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジアなどとの相互関係を規定する委員会を設置した。（議長：民族問題人民委員スターリン）
- ・8月半ばに、「自治共和国」案を採択、9月にはグルジア共産党中委員会の激しい反対を抑えて、9月24日～25日に原案を確認。
- ・各共和国がロシア共和国に正式に加入する手続きを決めるもので、各共和国の主権の移譲である。「独立共和国」となった各共和国のロシアへの事実上の編入である。

民族問題（2）レーニンの反対案

レーニンのメモ（手紙）

- ・「加入」ではなく「合同」して、欧州アジアのソビエト共和国を結成する。
- ・他の共和国もロシアと平等な権利を持つ方向にする。

スターリンらの対案

「ウクライナ、ベロルシア、ザカフカース共和国連邦、ロシアの間に「社会主義ソビエト連邦」に統合する条約を締結し、その各国に「連邦」から自由に脱退する権利をのこしておく必要を認める」

民族問題（3）「ザカフカース連邦」の成立

- ・アゼルバイジャン、グルジア、アルメニアの独立した名前が消え、「ザカフカース連邦」が登場して、それとロシアとの「平等性」が主張されている。
- ・「ザカフカース連邦」は、1918年4月に結成、その後解体し、ドイツ軍、英国軍、トルコ軍がそれぞれ支配。

- ・ 1920 年 4 月バクー蜂起でアゼルバイジャン社会主義共和国樹立。

11 月アルメニア土着政権がトルコ軍に崩壊されたに対して赤軍（オルジェニツキ）によるアルメニア社会主義共和国樹立

- ・ (グルジア) 1918 年 6 月メンシェビキ政権成立。

1920 年 5 月 ロシア、グルジアと正式国交

1921 年 2 月赤軍がメンシェビキ政権打倒し、グルジア社会主義共和国を樹立。(グルジア共産党の了解なし)

- ・ スターリンの強引なグルジア政策は何に起因するか。

レーニンの覚書

「同志カーメネフ！ 私は、大国的排外主義にたいしてどこまでも命を賭けて戦うことを宣言する。この呪われた悪い歯を抜き次第、私はすべての歯でもってそれを喰ってしまうであろう。

連邦の中央執行委員会では

ロシア人、

ウクライナ人、

グルジア人、その他

が交互に議長をつとめることを、絶対的に主張しなければならない。

絶対的に！

あなたのレーニン」

参考文献

- ・ 廣瀬陽子『コーカサス国際関係の十字路』集英社新書 2008 年 初刷
- ・ M. レヴィン（河合秀和訳）『レーニンの最後の闘争』岩波書店 昭和 44 年

以上

(文責・校正 新藤通弘、大村 哲)